

# 「土地」と「場所」——二十世紀の建築に向けて

内藤 廣

二十世紀の建築とは何であつたか、と問うことは、二十世紀とはなんであつたか、と問うことと等しい。何故なら、建築とは總体として見るとその時代を生きた人々の無意識の現れであり、どのような建物であれ、その主人の世界観の現れであるからだ。歴史を見れば明らかのように、建築はその時代や世界と不即不離な存在であることを免れない。

## 「立ち上がる建築」と「舞い降りる建築」

イタリアのシンポジウムに出たとき、配られたプログラムに印刷された絵柄に目がとまつた。そこにはラフなスケッチが印刷されていた。洒脱なタッチで山間の風景の中にギリシャ、ゴシック、ルネサンス、そして近代建築が描かれている。おそらくコルビュジエのスケッチだろう。たしかにうまいスケッチだが、それだけならどうということはない。気になつたのは、近代建築が他の時代の建物よりも一段高いところに描かれていたことだ。コルビュジエは、自分の提唱する近代建築が、どの時代の建物よりも高い位置にある、と言いたかったに違いない。

どのように考えるかは自由だ。それはそれで良いとして、もう一つ気になる点がある。他の時代の建物は、地面にしつかりと根を下ろした感じで描かれているのに対して、ピロティのある近代建築は、あたかも空から降ってきたかのような描かれ方をしている。近代以前の建物が地面から「立ち上がる建築」であるのに対して、近代建築はどのような場所であれ降り立つことができる「舞い降りる建築」だ、ということか。

この象徴的で示唆に富んだスケッチは、われわれが抱えている現代の建築状況、近代建築が溢れかえっている状況、それによって場所性がどんどん希薄になつてゐる状況、をよく写し取つてゐるようにも思える。近代建築は、どのような場所であれ降り立つことが出来る。「近代建築にとって、場所は不要だった」のだ、という背筋が凍るようなテーマが思い浮かぶ。

## 場所の死に方

中野好夫の『人間の死にかた』という本が好きだ。トルストイ、フロイト、スワイフト、正宗白鳥、江藤新平など歴史上の人物の死に際しての物語だ。各々個性的であり、人生と創作を総括していくような生きざまが面白い。あたかもあらかじめ意図されたかのような一点に集約していく、死とはそのような性格のものかも知れない。もしそうであるなら、われわれは「場所の死」について語る季節を迎えているような気がする。「場所」が果たしてきた役割を総括し、「場所」が可能にしたことを、人の死を痛むように思い出してみる必要がある。

人の死がそうであるように、死はそれだけでは完結しない。一つの死は、必ず生きる者に何かを投げかける。そのことによつて死は完結することを免れ、未来に向かつて開かれるのである。死は生に対して、完全には勝利し得ないのである。果たして、瀕死の状態にあり、もう幾許かの力も残っていない「場所」は、何を伝えようとされているのか。その死に際しての哀悼の辞を準備せねばならないだろう。この草稿は、そのための準備である。「場所の死」ということを考え始めたのは、バブル経済の頃に遡る。バブル経済は、ひとつの時代が大きな変曲点を迎えるに当たつて登る最後の急勾配だったのではないか。至る所で在りもしない土地の価値が無数に捏造された。今、雨後のタケノコのように立ち上がりつつある超高層は、都市再生という名前を冠しているが、見方を変えれば体のいいバブルの後始末だ。その頼りない陽炎のような立ち姿は、バブルの亡靈のように見える。超高層はまだまだ立ち上がる。超高層の足下でバブルの荒波にも耐えていた街が消えていく。時代によつて繁栄と衰退を激しく繰り返す、それも都市の生命力の証であり、宿命なのかも知れない。しかし、そう思つても、焼け跡以来、つましく積み重ねられてきた生活の場の記憶が、経済の圧力で易々と消えていくのを口惜しく思う。

地方都市の現況は様々だ。しかし、大方は苦しい。県庁所在地を除いて、どの市町村も例外なく急速な高齢化と人口減少、中心市街地の衰退に苦しんでいる。街の中心が空洞化しつつあることは、今や誰の目にも明らかだ。街の中心が高齢化と人口減少のマイナス圧力によつて壊死しつつある。地方都市を取り囲んでる農山村も、高齢者が頑張つてゐるが、それもやがて限界が来るだろう。林業を中心とした山となると、情況は更に深刻だ。

地方の人口減少は今に始まつたわけではない。戦後ずっと人口は減り続けてきたのだ。拡大傾向の経済下では、都市部で生み出された余剰を税金で吸い上げ、人口減少の穴埋めとして公共事業が割り振られてきたからバランスが保たれてきただけだ。縮小傾向の社会ではそはないかない。その結果、人口減少と過疎の問題が深



25 特集／内藤廣の風景論へ

刻な問題として急速に顕在化しつつある。都市では、都市再生の美名のもと、場所が資本によって収奪されてしまう。地方では、場所が力を失つてゆく。いずれにしても、場所は死につつある。

しかし、時代の潮目は変わりつつある。

## 何故、今「場所論」なのか

建物や土木構造物といった構築物が、空間的にも時間的にも人と緊密で穏やかな連続性をもつて存在するところを「場所」と呼び、その構築物と「場所」との関係の持ち方や意味や重要性を論ずることを「場所論」と呼ぶことにしたい。

何故、今さら「場所論」なのか。過去、無数の「場所論」が論じられてきた。いまさら、の感がある。ともすればこれまでの「場所論」は、もの造りや生活者の良心に訴え掛けることが多かつた。どのような場所であれば、唯一無二のものであり、それを尊重することは生きる上で必要不可欠のことである、という論調だ。場所と同じく、風景も似たようなトーンで語られことが多い。

場所の大切さを語る人は、善良で、心優しい。人の心の奥底には善良なものが潜んでいて、その善良なものに呼び掛ければ、人は自らの内にあるそのような心の情動に気付き、賛同し、やがては輪が広がっていく、という性善説的な立場が基本だ。もちろん、この考え方シンパシーを感じる。しかし、そこに生まれてくる共通の意識が未来の共同体の土台になるはずだ、という樂天的な雰囲気が気にかかる。冷静に見れば、世界に冠したる商業国家になろうとしている国にあっては、農本主義的な幻想にも見える。

現実を見れば、「場所論」は大勢においていつも負け組だ。常に経済と制度に、無惨に踏みにじられ、その狡猾さに辛酸をなめさせられ、パワーに蹂躪され、挙げ句の果てに無視され続けてきた。戦後、何ごとも経済を優先させることが国はだつたのだから、これも仕方のないことかも知れない。場所の大切さより経済的な復興の方が優先されたのだ。

前川國男ですら「負けければ賊軍」と自嘲的に言つた。そうならないためには、「場所」にどのような力が働き、「場所」を巡る仕組みに何が隠されているのか、徹底的に意識化する必要がある。

今や、「場所」は、経済を成り立たせるための付加物でしかない。その評価はあくまでも、いかにして経済的な指標の足しになるか、程度だ。銀行は「場所」ではなく「土地」にしか担保価値を見出さない。これはバブル後の今でも同じだろう。「場所」が担保価値となりうるような建物を生み出してこなかつたからだ、と言わればそれまでだが、実際は、土地本位制こそがこの国の根幹であつたのだから、どんなに価値のある建物を生み出しても、どんなに価値のある場所を作り出しても、そこに経済的な価値を付与することなど、政治

も銀行も初めから頭になかったはずだ。いわゆる不動産という市場原理が、不良債券処理に狂奔する圧力のもとで土地の価値をバブル期より巧妙な手段で捏造したのであり、それが金融システムを稼動させるベースとなつたのだ。資本主義経済とは名ばかりの土地本位制の再来だ。建物が経済的な価値を生むことなど前提にしない、だから作られる時に効率的で安ければいい、これがこの国の価値観の土台となつていて。これほど建物を粗末に扱い、土地を大切にする国もないだろう。

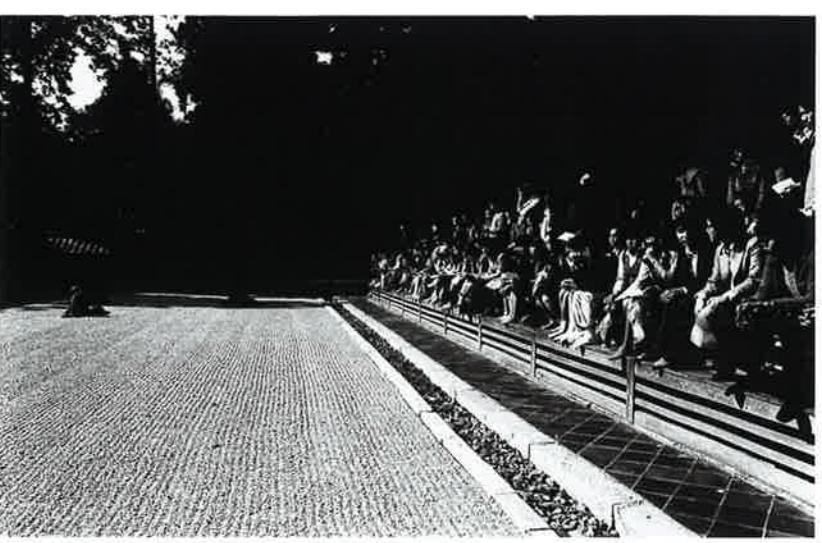
ここまで使つてきた「土地」と「場所」という言葉はそれぞれ指し示すものが違うことに留意しておく必要がある。「この場所はわたしのもの」と言うときと「この土地はわたしのもの」と言うときは、明らかに指示しているものが違う。何気なく使つてきたこれらの言葉の意味の違いの中に、これまで見過ごされてきた重要な事柄が潜んでいる。

### 「人と人間」

あえていくつかの乱暴な定義と強引な論理構築をしながら、議論するための土台を作りたい。ここで組み立てた仮定と仮説は、いくらでも批判が出来るだろう。緻密さという点では、まったく精度に欠ける。しかし、ここから始めねばならないほど、建築界では言葉が錯綜している。建築という言葉のみならず、それを取り囲む言葉がまるではつきりとしていない。何かを論じようとしてもそれを組み立てるための道具が不確かなのだ。誰かが仕掛けなければならないので、ここで口火を切ることにする。

建築も都市も田園も、人が暮らしていくためには、まずその上で暮らしている人間という言葉から入らねばならない。

ボーデリアールの訳者として知られている塚原史は、フーコーの『言葉と物』を引用して、「人間」という概念は十八世紀以降の近代国家が生み出したものだ、と書いている。塚原の論考に触れるまでは、考えてもみなかつたことだ。冷静に例示を上げて進める塚原の論には説得力がある。「人間」というステレオタイプを仮定し、そこに向けて均一な制度を被せていく。いや、近代国家が必要とする法制度が成立するためには、それに当たる「人間」という存在が、実態に則していようがいまいが、どうしても必要だつたのだ。「人間」は、背の高さなどのサイズが一定の偏差の中に収まつていて、さらにはその精神も一定の偏差の中に収まつているはずだ、という考え方。ここから外れた者は、「人間」ではない。これが近代という仕組みが持つていて機械的な冷徹さの本質だ。



## 言葉について考える

塚原に刺激されてブーコーを読んでみると、彼自身が自らの作業を考古学と呼んだように、膨大な資料を駆使しながら制度と言葉の成立に迫つていく精神の鋭さと強度に胸打たれるものがある。このニーチェ、ハイデッガー以来の二十世紀哲学の巨人は、言葉を手掛かりにして近世と近代の構造を白日のもとに曝そうとしたのだ。言葉は社会や制度が生み出したものだから、対象が意識化されて初めて成立する。つまり、人の心に浮かび上がったものが言語化される。この観点に立てば、われわれの身の回りには、何と多くの曖昧な言語が満ちていることだろう。その多くは、百年程度の歴史しか持たない明治に作られた言葉だ。外来文化を翻訳する必要が生じた時、どのような言葉を当て、また、造語として作り出したのか、何かを凝視して考える時に、そのはじまりに注意深くならねばならない。

我が国では、MankindやHuman-beingという奇妙な言葉の訳として「人間」という言葉が当てられた。何故、「人(ひと)」「間(あいだ)」「世(よ)」が「人間」なのだろう。「世(よ)」の「間(あいだ)」が「世間」なのと似ている。もともと明治初頭にはジンカンと言い、世の中という意と区別されなかつたらしい。何かを抽象化しようとする時、「間」という漂う霧のような言葉で表現する習慣があるのかも知れない。主体的な意識、はつきりとした対象を持たせたくない時、人間や世間という言葉は現れる。何かを指示させなければならぬけれど指示示しきれない時、「間」という概念を当てはめておく。そうする」とによって意味を留保しておく、そういう知恵と習慣があるに違いない。おそらく抽象的な「人間」以前には、個別のサイズや価値観を持つた「人」が居たのだ。

## 「人と場所」、「人間と土地」

「人間」という言葉も、「土地」という言葉も、近代国家が姿形を作ろうとした時に生み出した明治造語だろう。「土地」は「広さ」と位置を持つた数量的な存在」なのだと捉えたい。具体的な数量を持つてるので法的な制度に乗せることができる。また、貨幣価値に置き換わる商品として売買の対象になり、実はこれが一番大切なところかも知れないが、税金を掛ける対象になる。近代国家、近代的な制度、資本主義、これらは「土地」という概念を必要とし、それ故それを捏造し、貨幣経済を稼動させるための駆動力とした。「場所」は商品にならないが「土地」は商品になる。三菱は皇居前の陸軍省用地だつた丸の内を買い取った。瀧澤栄一は郊外の宅地開発に乗り出した。株式と共に不動産事業は、担保価値というバーチャルな資産を生み出す元となつた。

「人間」という言葉も、「土地」という言葉も、近代国家が姿形を作ろうとした時に生み出した明治造語だろう。「人間」は「広さ」と位置を持つた数量的な存在」なのだと捉えたい。具体的な数量を持つてるので法的な制度に乗せることができる。また、貨幣価値に置き換わる商品として売買の対象になり、実はこれが一番大切なところかも知れないが、税金を掛ける対象になる。近代国家、近代的な制度、資本主義、これらは「土地」という概念を必要とし、それ故それを捏造し、貨幣経済を稼動させるための駆動力とした。「場所」は商品にならないが「土地」は商品になる。三菱は皇居前の陸軍省用地だつた丸の内を買い取った。瀧澤栄一は郊外の宅地開発に乗り出した。株式と共に不動産事業は、担保価値というバーチャルな資産を生み出す元となつた。

## 「建築」、「空間と建物」

ちなみに、よく知られているように「建築」というのも明治造語で、それまでは「普請」と言つていた。明治十九年に出版された工学系の英和辞典である『工學字彙』では、「造営」あるいは「造営術」と訳されている。architectureという言葉に対する理解が足りない中で、どちらかというと実際的な側面で捉えられていたことが分かぬ。」の中やGothic architectureを「ゴス造営術」と訳しているから、技術的な側面の上位にある時代を統べる様式に対してはまったく関心が払われなかつたのだと思う。ちなみにbuildingは「家屋」と訳されているところが面白い。

あまりはつきりとした定義を行わないまま、本来、西欧では複数形のない抽象概念として扱われるarchitectureを具体物であるbuildingと区別せずに「建築」としてしまつたところから、我が国の建築に関する議論が捻れ、曖昧なものになつてしまつた。法制度にしても同じ」とが言える。建築基準法は、物理的な建物の成り立ち方に関する法律だから、本来なら建物基本法と名前を改めるべきだろう。抽象的な価値に言及するときもarchitecture・建築、具体的な物としての価値に言及する時はbuilding・建物、と厳密に区別すべきだ。

「建築」をどのように捉えるかは、古来より普遍的なテーマとして数々の解釈と議論がなされてきた。抽象概念である「建築」は、壁や床や屋根といったハードウェアとしての「建物」と、それによって囲まれた「空間」とを包含する概念だ。さらに、本来の意味での「建築」は、「物事を作り上げる意志と構成」といったニュアンスに近く、その意味ではこれらの区分けの上位概念と捉えるべきだ。また、コンピューターであれ街造りであれ、何を扱おうが、そこに働く「物事を作り上げる意志と構成」をarchitecture・建築と呼ぶことができる。現状は、建物を設計する一団である建築家が、この言葉を独占し、混乱させていくに過ぎない。

「建築」とは、本来もっと広い範囲を支える概念だし、そうであるべきだと考えていて。したがつて、ここまで論じてきた流れでいえば、「土地」は「建物」と、「場所」は「空間」と呼応する。さらにいえば、「人間」「土地」「建物」と「人」「場所」「空間」という区分けをすることができる。



自分なりの設定だが、「建築」は彼らの上位に在つて、「抽象的な価値と具象的な価値を橋渡しする構成的な意志」と捉えたい。この意志の働き方によつて、世の中の様相が変わる。

これはあくまでもこの論考の中で、わたしなりの考え方を明確にするための言葉の定義と考えていただきたい。

## 「場所の土地化」と「土地の場所化」

もともと、この国は豊原瑞穂の国を起源とし、農業を土台に國の姿形を整えてきた。農業国家であった頃の「場所」は、生産の場であり、なつかつ經濟の場でもあつた。それらの均衡を保つことが、生存を保証した。生存は何よりも重い。だから、非常に強固な価値、場合によつては經濟より遙かに優先されるべき価値だつた。ここで言おうとしている「場所」は、人が記憶を重ね合わせることのできる具体的な領域、日常の営みや自然の生存と深く関わつた領域の事としたい。

俯瞰してみれば、「場所」の重要性は軽くなり、その意味は希薄になる一方だ。身の回りに起きてきたことを思い出してみればよい。事は明白だ。貫して起きてきたこと、そして、バブル經濟の時に加速度的に広まつた動きを総括すれば、「場所」を「土地」に読み換えていく一連の流れ、ということができる。

近代建築は「場所」を必要とせず、「土地」の上に建つ。言い方を変えれば、「場所」を「土地」化するのだ。もともとの意味での「建築」は「場所」を生み出すために「土地」の上に立ち上がるのではなかつたか。「建築」はその困難な使命を担うが故にヒロイックな存在だつたことを思い出しておいた方がよい。建築家は、これまで幾度も「空間」を戦道具として、「土地」を「場所」へと作り換えると戦つてきた。つまり、単なる数量的価値、流通する商品としての「土地」を、住まい手にとつてそれらを乗り越える「場所」とするべく戦つてきた。しかし、「空間」の個別的な抵抗などでは、經濟のおおきな流れには勝てるはずもない。經濟的な力は巧妙である賢い。

## 無意識の同調

恐ろしいのは、建築家達の作るものなかで先鋭的とされる建物が、超高層的言語やコンビニ的言語をリピートしていることだ。建築雑誌をマジマジと見てほしい。多くの建築家達の表現の裏にあるもの、無意識に誘われている先にあるものは、超高層やコンビニの作り出す空間と等質のものだ。若手の建築家達の多くは、意外なことにそれに気付いていない。そういう戦略を探つた方がよりファッショナブルな世界に近づくことができる、という誤った神話のようなものがあるのかも知れない。反発しているつもりが取り込まれている。これを前提とする世の中の一員であることに後ろめたさを感じていたからだ。

郵便ボストン詰め込まれる不動産のパンフレットを見る。そこには、日常生活が営まれる「空間」があらかじめ用意されているかのときイメージを買い手に思い描かせる「建築のような顔をした建物」、地域性や歴史性を受け継いだ「場所のような顔をした土地」が、大量に商品として出回つてゐる。本来の意味での「建築」的な価値は不動産の玩具となつて、「場所のようなもの」が捏造されてきたのだ。ビルズ、コート、といった名前がいかに空々しいものか、誰もが実体を知りながらそれを批判してこなかつたのは、自分自身もそれを前提とする世の中の一員であることに後ろめたさを感じていたからだ。

集合住宅であれオフィスであれ、東京の空を埋め尽くしつつある超高層、あれを「建築」と呼べるだろ?か。例外的なものは在るにせよ、よくよく見れば、いかにも「建築」的デザインを駆使した巨大な「建物」に過ぎない。そこに「場所」と「空間」がないからだ。悪貨は良貨を駆逐する。血みどろの努力で生み出された本物と形だけ借用した要領の良い偽物とは、素人目には区別が付きにくい。住宅からマンション、普通の建物から超高層オフィスまで、偽物がいかに堕落した風景を作り出したかは、東京のありふれた街を見ればよい。この弛緩した風景は、おそらく「生存の頼り」にはならない。

なんにせよ、あなたが、わたしたちが立つてゐる「場所」は、意味が根こそぎ希薄になり、気持ち悪いほど薄まつて、死滅しつつある。これこそが、近代が追い求めた社会の質、人間感性の質だったのかも知れない。狭い意味での「建築」はそれに抵抗する術をついに見出せないまま事が推移してきた。これまでの狭義の「建築」が作り出そうとしている特異点だけでは状況を変えられない。事物を抽象化する流れに逆らおうとしても、狭義の「建築」はついに力を持ち得なかつたことを再認識すべきだ。「場所」を復権させるための有効な道具とするには、「建築」の概念を根底から考え直し、その外側から定義し直し、その上で「人・人間」「場所・土地」「空間・建物」「街・都市」の意味付けと関係を再構築しなくてはならない。

そのためには、旧来の「建築」や「建物」という閉じた価値の外側に焦点を当て、そこから自らの輪郭を描いていかねばならないだろう。外側とは、「場所」と「土地」、「街」と「都市」、「風景」と「景観」のことだ。いついかねばならないだろう。

## 新しい流れ

絶望的になる必要はない。負け続ける戦はない。世の中の趨勢はどこかで変わる。二〇〇五年を境に我が国は人口減少へと向かつた。この傾向は、人類の歴史を見ても初めてのことだといふ。どの時代を見ても参照出来るものはない未体験ゾーンに突入したのだ。今は、いわば人口増という坂道をずっと上り続けてきて、峠に



差し掛かったところだ。峠での変化は緩やかなものだろう。しかし、そこで徐々に見えてくる風景は劇的に違う。今という時に現れている僅かな違いは、やがておおきく決定的なものになるはずだ。変化は当初は緩やかで、やがて山を下るように加速度的なものになっていくだろう。

われわれは現在、ちょうどジエットコースターの最初の頂上に居るようなものだ。ここから先は、急降下、宙返り、絶叫するような時代がわれわれを待っている。今の内に心づもりをしておかねばならないだろう。峠の頂上で見えてくる次なる別天地はどのようなものか、その眺めをしつかりと見ておかねばならない。

本当の意味での「場所」の復権を、「土地」を扱う人達に求める時期が来ている。都市再生によつてではない、人口減少によつて、明らかに世の中はこれまでとは違う方向に動き始めている。

時代の潮目は変わりつつある。

## 「場所」を制圧する力

作家の時代に対する直感は侮れない。『どこにでもある場所とどこにもいらないわたし』という村上龍が本のタイトルに使つたこの言葉は、まさしく現代の日本という国を埋め尽くしつつある情況を活写している。学生に地方都市の現況を伝える時に、この言葉を使うときわめて反応がよい。若者の感性の核心にこの言葉は直接的に働きかけるようだ。

現実に「どこにでもある場所」がどこにでもある。経済という均質な力、それを至上目的としてきた行政的な力が、「どこにでもある場所」を作り出してきたのだ。その結果、寄る辺ない「場所」つまり「土地」の上に立たされることになった自分は、自分自身を確認できない。「土地」の上に「人」は立つことはできない。だから「わたしはその風景の中のどこにも居ることができない」のである。「人」は「場所」の上に立つことによって、はじめて自らを再確認できるのだ。

今や定番ともなった地方都市の郊外に広がる幹線道路沿いを思い出してほしい。カーディーラー、ファミリーレストラン、コンビニエンスストア、それらは全国平均の都市の風を運んできててくれる。しかし、どこにでもある風景、ありきたりの場所を広げていく。そうしたもののが繁盛するのは、人がそれを求めているからだ。いやならば人はそこに行かない。だとすれば、こういう風に言うことも出来る。風景の喪失は、みんなが求めた結果である、と。

近代都市の証たるものもつとも先鋭的な先兵は、超高層とコンビニだ。これらは近代国家が生み出したきわめて分かりやすく効率的な道具だ。超高層を建てることは、その破壊力を考えれば、「場所」にミサイルを打ち込むようなものだ。また、コンビニが広がっていくのは、そのしたたかさを考えれば、「場所」に地雷を埋め直接いたいたのだが、とても読めないと思うよ、と自嘲気味に笑つておられたのを覚えている。

後発的に派生した建築やプロダクトでは、生産原理を中心としたサプライサイド主導のもの造りを否定して、利用者であるディマンドサイド主導のもの造りを目指したという点で、しごく真っ当なムードメントであつたと考えている。ただ、我が国においては、この主張が瞬く間に矮小化され、都合よく再解釈されたところに大きな問題があつた。なんでも輸入文化は表層の使いやすい所だけ取り入れて、その本質を問わない、というのは、我が国の文化の特質もある。それが消費社会の本質であり、表に貼り付いた表象が付加価値としての商品なのだ、というのは分からぬでもない。それがいずれ消えて無くなる耐久消費財ならまだ許せる。しかし、建物や街となると話は別だ。

建築ムードメントとしてのポストモダニズムは、悪いことに、その隆盛がバブル経済の時と重なつたのが不幸だった。経済の異様な圧力によつて急激に建物が増える時期に、ポストモダニズムの建物が大量生産され、世の中にバラ撒かれた。個別性、多様性、複雑さ、隠喩、誇張、といったポストモダニズムの建築言語は、瞬く間に消費社会の渦に飲み込まれた。表面的な意味だけが誇張され、矮小化され、商品化された。

ここで大勢は決まつたのかも知れない。「建築」は近代的な商業国家を演出するための小道具となつたのだ。これまでの矮小化された「建築」の枠組みでは、この流れには逆らえない。「場所」を取り戻したいのなら、われわれは貨幣経済に絡め取られない「新しい建築」を発明せねばならないはずだ。



## 「街」のポストモダニズム化

現在、至る所の地方都市で「街造り」が行われている。総務省が勧める市町村合併に伴う合併債、国土交通省が所管するまちづくり交付金事業、中心市街地活性化法。そうした幾つかの支援策が重なって、街造りへの動きがこれまでになく活発化している。少子高齢化や中心市街地の衰退は、目を覆いたくなるほど露骨な形で現れてきている。どうすればよいのか、藁にも縋る気持ちで幾つかの施策を取り込んで、街の新しい姿形、風景造りがすすめられている。

そうした動きの総仕上げをするかのように、国土交通省は、宣言とも言える「美しい国づくり政策大綱」を二〇〇三年に発表し、続いて「景観法」を二〇〇四年に成立させた。すでに二〇〇以上の市町村が、景観法を適用する前提条件となる景観行政団体に名乗りを上げている。こうした情況を見れば、いまや「景観」は時代のキーワードになったかのように見える。この動きは、要約すれば、「場所性の強化」、場所に張り付いている「歴史性の再評価」ということになる。大きく見れば、こうした手法を使って、街の個性化を計り、他の街との差別化を計る、という試みである。

まだ確信はないのだが、全国で行われている街造りの高まりを見ると、いささか危惧するところがないわけでもない。建築や都市や土木といった近代的な生産諸力があまりにも急激に地方都市を変えたために、それによって壊されてしまつた風景を取り戻すことに意識が向き過ぎているようにも思える。ほとんどの場合、取り戻す意味や取り戻した先に見える未来に対して、明確に意識化されていない。制度と予算にばかり目がいつてしまつて、本質的な合意形成や世論喚起が後回しになってしまっている。現状は、制度的な枠組みや予算処置などが出来たから、それに向かつているに過ぎない。制度が出来、予算がついて、街造りや風景造りがあるのではない。それは話がアベコベだ。

今、多くの地方都市で交わされている景観論議は、危うい側面ももつてゐる。かつて個性化、個別化を求めるあまり建築で湧き上がつたポストモダニズムと似た傾向があまりにも急激に地方都市を変えたために、それた個性化や個別化という異に、今まさに落ちようとしているのではないか。そこでは「場所」の価値が再び捏ねられているのではないか、それを注意深く見守る必要がある。捏造されたものは、瞬く間に価値の減衰を余儀無くされるからだ。死にかけた街がそうであつて良いはずがない。

現在、目の前にあるほとんどの「風景」は、たとえそれがどんなに情けないものであつても、酷いものであつても、みんなが受け入れ、みんなが望み、そしてみんなが見捨てた、その果てに流れ着いてきたという必然性がある。「風景」はその時代を生きた人の映し鏡、その時代の人の姿であり無意識の現れそのものなのだ。

今、人々はハタと立ち止まり、周囲を見回し、その「風景」に呆然としている。それは、働き詰めていつまでも自分だけは若いと思い込んでいた人が、老いて疲れ果てた自分の姿を突然鏡の中に見つける気持ちに近い。そこには、よく頑張ってきたという気持ち、ここまで来たのか、という気持ちが頭の中で重なりあつてゐるはずだ。「風景」は、どのようなものであれ、まさしくその時代の肖像なのだ。

そうした「風景」に対して、街造りや景観造りは「あえて意識的に不自然なことをやる」のである。街造りや景観造りの結果、街の在り方をそれに合わせていく、といふ逆の流れを作つていかねばならない。これまで見出した「卓越した均衡点」であつたといえる。当然の事ながら、本来的な意味でそこには戻ることは不可能だ。したがつて、街造りや風景造りのいまの流れを表面的なもので終わらせないためには、新しい社会の新たな均衡点を探すような、内発的なものにしていく必要がある。これは相当大変な作業となるはずだ。

## 「景観」と「風景」

「人間」「土地」「建物」「都市」「景観」という抽象的概念と、「人」「場所」「空間」「街」「風景」という具象的概念の対立を描こうとした。「建物」と「空間」を区分けしたとき、あえて「建築」という言葉を除外した。「建築」はそれら諸要素の上位に在つて、「抽象的概念と具象的概念に橋渡しをする意志」と捉えたのだが、この意志の働き方によつて、世の中の様相が変わる。

近代とは、貫して、制度的な枠組みの中に「建物」を捉えようとした動きであり、「空間」はそれに対しても抗う勢力だった。「建築」という言葉が、じつは近代建築というイメージと重なつてゐることを思い出しておく必要がある。それを払拭するためには、近代の枠組みを越えた新たな「建築」の定義が必要だろう。その



中でしか近代建築のもたらした功罪を位置付けることはできないからだ。外から狭義の「建築」という価値を打ち砕き、捉え直す必要がある。「建築」という枠組みを外し、本来の広がりを持たせる必要がある。

近代の持つている抜きがたい性質として、具象的概念を抽象的概念に置き換える力がある、ということに気付く。近代という枠組みにあつては、「建築」の役割は、常に具象を抽象へと橋渡しする所にあつたと捉えたい。それは、「人」を「人間」に、「場所」を「土地」に、「空間」を「建物」に、「街」を「都市」に、「風景」を「景観」に、それぞれ橋渡しをし、変えようとする力だったのではないか。

制度や経済に絡め取られた抽象概念が溢れかえっているのが現代という時代であり、その現れとして「どこにでもある場所」がどこにでも出現することになった。新しい「建築」、これから求められる「建築」が在るとなれば、これまでとは逆方向の橋渡しをする概念なのではないか。それは、抽象を具象へと置き換えるための橋渡し、抽象を具象に向かわせる概念なのではないかと思う。

## 「建築」と「景観」

わたしは今、その「建築」を設計しながら、「景観」という曖昧な領域に足を踏み入れている。この間のいきさつに関しては、いろいろなところで書いてきたので、ここでは触れないことにする。ただ、わが身に感じている異様な感触だけは、このテリトリリーに足を留めている間に述べておいた方がよいだろう。

わたしの研究室は景観研究室という名前になつていて、十年前に篠原修さんがこの名前で創設したのを引き継いでいる。建築を生業としてきた者が景観をやる、というのは本来なら場違いもいいところだ。もともとは、篠原さんから土木の分野にデザインを根付かせて欲しい、と希望されてのことだつた。しかし、実際に巻き込まれてみると、果たさねばならない役割は広がる一方だ。街造り、景観計画、マスター・プランの策定、制度的な枠組み作りなど、多種多様な局面でいくつもの役割を果たすことになっている。その中で、建築家として関わっているものはごく僅かだ。五十歳近くまで建築の設計を必死でやつてきたのだから、そう簡単には思考方法を変えることは出来ない。さまざまのことに対処する際、わたし自身の思考方法は一貫して建築を設計する中で作り上げてきたものに変わりがない。

現状を直観的に把握し、そこに在るべき姿を構想し、経済的状況を理解し、法制度と現実のバランスを調整する。さらには、工学的な知識を駆使し、専門的な知識を持つ人の力を借り、現場の志氣を高め、求められるものを具体的に現実化していく。建築では当たり前のことだが、その中で得た思考方法を延長していけば、それが実に広範な領域で活用出来ることに驚いている。建築的思考は応用範囲が広い。また、様々な領域で求められていることを実感している。

## 「景観」から「風景」へ

「景観」という言葉を身近なものとして、すでに五年が経過した。だから、いかに門外漢でもこの言葉について自分なりの考えを多少なりとも述べることは許されると思う。

景観法が施行された。法律の一部となつたわけだから、法で述べる「景観」という言葉は、何を指示示すのか定義されていると思い、条文を読んでみた。しかし、そこには「景観」という言葉が明確には規定されていない。国土交通省に聞いてもはつきりとしない。「景観」という言葉は、ついに「建築」という言葉と同様に、何を指示示すのか定義されないまま法律になつたのだ。だから、とりあえず自分なりに意味を決めてこの言葉を使つていかねばならない。

「景観」は、見えている眺めの物理的状態を言い、「風景」は、見ている側の心理的状態の中に現れる像、というように捉えたい。「景観」は、数量や構成へと分節化出来るが、「風景」は統合的なイメージの中にしか存在しない。

「景観」という言葉は、近代的な仕組みの中で分節化されうる抽象概念であり、法律の中で捌きやすい言葉だといえる。「景観」は、見られる客体となり得る。したがつて、ゲシュタルト、ノード、といった概念として追いかけることが出来る。一方、「風景」という言葉は、見る側の主体に属し、かつ常に曖昧な全体であり、ハッキリと対象化し、分節化することが出来ない。これはわざなりの単なる用語の捉え方と考えてもらいたい。共同体が自らの生存を自覚的にコントロールしようという意志のある所には、必ず「場所」が生まれ、その結果として「風景」が存在する。つまり、「風景」は生存に対する共同体の無意識的な現れ、と言い換えてよい。たとえ手付かずの自然があつたとしても、それを保持し、意味を与え、共同体のミクロコスモスの射程に捉えようとする。手付かずの自然も共同体の意志によって物語や神話という意識の枠組みの中で位置付けられる。海や遠くの山でさえ、意味を与えられ、「風景」になる。

全国で行われている街造りは、かつて近代が志向した、すでに在つた具象的な価値を抽象化していくのとは逆の方向、つまり、すでに抽象化され尽くしてしまつたものを具象化する方向へと進んでいる。これは、「土地」を「場所」へ、「景観」を「風景」へと作り換えていくことに他ならない。制度や経済といった抽象的な価値に絡め取られた「どこにでもある街」を、記憶や身体的な実感を伴つた具象的な価値である「そこにしかない場所」へとえていく力をどのようにしたら手に入れることができるかが至る所で模索されている。



## 危ない予感

美術哲學の観点から風景論をやつてゐるフランスの友人に、風景論とナショナリズムは関係があるものなか、と聞いたことがある。その時、呆れたような顔をして、当たり前じやない、と言われてしまった。

我が国では、バブル崩壊以降、経済の停滞と相俟つて、ある意味では穏やかなナショナリズム的傾向が台頭しつつある。これをどのように捉えるかは、真剣な議論が必要であることは言うまでもない。これは危険な領域である。戦後、建築も都市も一貫してこの辺りの議論を避けてきた。風景論でも真正面からこれを論ずることはタブーだった。戦前の偏ったナショナリズムの記憶を払拭するために、この領域を必死で封印し続けてきたのだ。だから、この種の議論に慣れていない。

しかし、地方の現実は厳しい。生き延びるために、個別性や独自性へと向かわざるを得ないだろう。グローバルな経済やその体现者である都市の圧力に抗するのは、個人の誇り、つまり、その街に留まる人の心の拠り所を強化するしかない。地方が向かって行かざるを得ないこの方向を要約すれば、「場所」の持つてゐる力の強化と「風景」の持つてゐる力の再構築へと向かうということになる。その時に、必然的にその先にあるものが浮かび上がってくる。

すでにお気付きの事と思うが、「人」「場所」「空間」「街」「風景」の先には「故郷」がある。また、「人間」「土地」「建物」「都市」の言葉の先には「国家」がある。この構図を意識すれば、「景観」や「風景」を論じることは、すでに「國家」や「故郷」を論ぜざるをえない領域に足を踏み入れてゐるということが分かる。

「場所論」が偏狭なナショナリズムに絡め取られないようにするには、どうしたらよいのだろう。今まで「建築」も「都市」も、この枠組みで論じられることがほとんど無かつた。したがつて、これを論じる言語を持たない。そこが危うい。本来的な意味での「建築」はこれらの領域をブリッジする役割を担つ。「建築」に

本來的な意味を取り戻すからには、このことに自覺的になる必要がある。迎合するのと意識的に受け入れるとでは大きな開きがある。今の状況を、無意識の内に看過すべきではない。これらの言葉をしつかりと意識の射程に置いておくべきだろう。

## 「新しい建築」に向けて

結局のところ、結論のようなものは用意できないでいる。建築から景観へ、漠然と自らの行動を投げ出している領域がある。その中で感じ取つたことを書いてきた。

- ◎「場所」は瀕死の状態であること
- ◎そこに至る過程で、具象的な対象を抽象化する近代の力に「建築」という概念が大きく荷担したこと
- ◎その結果、抽象化されて希薄になつた対象を具象的な「風景」へと無理矢理置き換えねばならない状況が生じていること
- ◎その中で「新しい建築」の概念は、これまでとは逆方向の流れに荷担せざるを得ないであろうこと
- ◎それ故、近代と同じ過ちを犯さないためには、そのことに意識的になる必要があること
- ◎そのためには言葉の定義を明確にしていく必要があることを述べてきた。

これまで建築の分野ではあまり論じられてこなかつた「景観」という言葉が、景観法という制度的枠組みの中で姿を現した。建築はこれをヒッティングボードとして利用すべきだ。この壁に向かって球を投げてみることだ。それによって自らの力と輪郭を身をもつて知ることができるはずだ。ここからは、建築家は「景観」のコードに反逆するにしろ、「風景」の異端児になるにしろ、一層の覚悟がいるだろう。反逆するにしても、自分のしていることの意味を語ることすら出来ない腰抜けアバンギャルドでは太刀打ちできまい。もはや、無邪気に近代の価値観の埒内に留まりながら物を作ることも許されまい。

「場所」も「風景」も死につつある。それらを近代という抽象化した枠組みへと導いてきた「建築」が力を失いつつあるのは、その対象を失つたからだ。事ここに至つたのは、「場所」も「風景」も眼中になかつた無自覚無節操で勝手気儘な近代「建築」に起因するところが大きいことは、ありふれたどこにでもある景色を見れば誰でも納得のいくところだろう。それだけに、街造りや景観の分野での建築に対する不信感は大きい。贖罪と自戒の念をもつて、建築自身の再定義と再構築をする必要がある。建築が「抽象的な価値と具象的な価値を橋渡しする構成的な意志」であるとすれば、それが導こうとする方向を逆转せねばならない。

本來的な意味で「新しい建築」の価値が在るとすれば、それは「場所造り」や「街造り」や「風景造り」の小道具ではない。社会全体の枠組みを捉える抽象的な価値と、人の心を支える具象的な価値とを橋渡ししての「風景」という言葉の中にしかなく、そのためには「新しい建築」という概念を、これらに橋渡しをするものとして鼎立する必要があると考えている。それ以外に、生きるに易く精神を保持するのが難しいこの時代を、建築家として清々として生き抜く術はないからだ。

ないと・ひろし／建築家



25頁写真：東京都庁展望室より 2006年  
26頁写真：龍安寺 1973年  
27頁写真：五十鈴川 2000年  
29頁写真：東京都庁展望室より 2006年  
30頁写真：東横線・渋谷駅 1963年  
31頁写真：宮崎県・北郷村 炭焼き小屋  
2000年  
32頁写真：渋谷 1963年  
34頁写真：芦屋シーサイドタウン  
2000年  
35頁写真：山形県・金山町 2005年  
36頁写真：北海道・天塩町 2000年  
37頁写真：東京ピックサイト 2005年  
39頁写真：瀬戸内海・佐柳島 1972年  
写真＝山田脩二